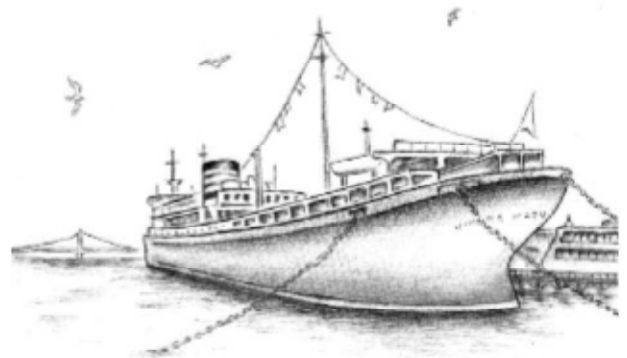


[今月の詩篇]  
第12篇

主よ、あなたはその仰せを守り  
この代からとこしえに至るまで  
わたしたちを見守ってください。



## 必要なことはただ一つ

主イエスと弟子たち一行を自分の家に迎え入れたマルタ。イエスさまと弟子たちだけでもその人数は13人です。その食事の用意のためにマルタはせわしなく立ち動いていました。他の人たちは皆、イエスさまのところに集まっていました。妹のマリアもイエスさまのところにいたのです。しかもマリアはイエスさまの足元に座っています。彼女は一人忙しく働いているマルタにはびくりともせず、振り向きもしないのです。落ち着かず、一人忙しく動くマルタはそのマリアを見て、ますますイライラしてきたと思います。通常、このような人の心は自分の思い通りに状況が改善されなければ、おさまりません。深まるばかりです。その結果、マルタの心はイエスさまへの不平を抱く心にまで及びました。マルタは自分の怒りを抑えきれず、イエスさまに「主よ、わたしの妹は私だけにもてなしをさせているのですが、何とも思いませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください」と言ったのです。

キリストは「マルタ、マルタ」と呼びかけました。キリストが二回も彼女の名前を呼ばれることは、その時の「心を乱していた」マルタの様子を物語っています。二回もその名前を呼び、そして「あなたはたくさんの方に思い悩み、心を乱している」と言われたのです。

「わたしの妹は私だけに、もてなしをさせているのですが、何とも思いませんか」

イエスさまをもてなしたい心、人々に仕えたい心から始まった奉仕だったと思います。しかし、その心はいつのまにか妬む心、自分だけが損をしている、マリアだけがいい所どりをして、自分だけが苦勞しているという心に変っていたのです。

キリストは「パン五つと魚二匹」で、男の人だけでも五千人を食べさせたことがありました。人里離れたところにまでキリストについてきた群衆が、また遠くにある町にまで行って、それぞれ自分の食物を見つけなければならぬ状況でした。食物が貴重な当時のイスラエルです。キリストは群衆を憐れに思いました。彼らを食べさせたかったのです。皆が満腹になるまで食べさせました。そして残ったパン屑が12カゴでした。どれほどの量のパンを裂いて渡したのでしょうか。休むために人里離れたところに来られましたが、疲れているご自身のことを忘れて、パンを裂いて渡していたのです。ただ群衆を憐れに思い、食べさせたかったからです。その心はパン屑が12カゴ残ったことに現れているのです。

「私だけが」という人の心。それによる不平、思い煩い。心を乱して自らを苦しみに陥れ、また自らを疲れさせているマルタの心。彼女に最も必要なことは何でしょうか。

只々「真実に」人に仕えていきたいと願うものです。